

『教行信証』における「光号因縁釈」の位置について

平 原 晃 宗

はじめに

親鸞における『教行信証』の撰述の意趣は、師法然の『選択集』に呼応して、「浄土真宗」の仏道を開顕することにあつた。それは『教行信証』「化身土巻」から了解できるように、念仏弾圧を背景とした『選択集』への論難に對して、選択本願念仏の教えを明らかにすることでもあつた。⁽¹⁾つまり、親鸞は法然の「真宗興隆」の仏事に応答し、『教行信証』を「真宗開顕」の書として撰述したのである。この『教行信証』全六巻の中で本願念仏の行を明らかにしているのは「行巻」である。「行巻」では、はじめに「諸仏称名之願 浄土真実之行 選択本願之行」と標拵の文が押さえられる。これは称名念仏が諸仏称名の願である第十七願を根拠とする浄土真実の行、さらには選択本願の行であることを顕示している。続いて「行巻」の冒頭では、

謹按^{テスルニ} 往相回向^ヲ 有^リ 大行^ニ 有^リ 大信^ニ

(『定親全』一・一七頁)

と述べ、往相回向の内実を「大行」「大信」として明らかにしている。「大行」とは「行巻」で、

然斯行者出_ニ於_三大悲願_一

〔定親全〕一・一七頁

とあるように阿弥陀仏の大悲願心による行のことである。また、「大信」は「信卷」で、

即是出_ニ於_三念仏往生之願_一

〔定親全〕一・九六頁

と念仏往生の願である第十八願を根拠とする信であることが述べられている。これらの文から、大行・大信は選択本願を共通の源泉としていることが窺知できる。つまり大行と大信は行信不離一体であり、「選択本願の行信」を明確にすることは、そのまま真宗における仏道を明らかにすることになると考えられる。この「選択本願の行信」については様々な観点から考察できるが、その中でも注意できるのが「行卷」で述べられる「光号因縁積」である。

光号因縁積は両重因縁積とも呼ばれ、名号・光明・信心・往生・成仏などの真宗における重要な事柄が述べられている積義である。また「行卷」の構成を見るならば、大行積から始まり、名号積を中心に据えながら三国の経論積の引用があり、その後、光号因縁積が展開される。「行卷」のこの箇所₃に光号因縁積が述べられていることや、その後に引用される『五会法事讚』・『観経疏』・『散善義』において「真宗」を押さえることなど、光号因縁積における課題は多くあると考えられる。そこで本論では、真宗の仏道の要が「選択本願の行信」であることを踏まえ、『選択集』の引用文から光号因縁積までを精読することにより、『教行信証』における光号因縁積の位置を確かめていきたい。

一、選択本願の行信と行信の利益

『教行信証』は親鸞にとって『選択集』に呼応した「浄土真宗」の仏道を開顕する書であるにも拘わらず、『教行信証』で『選択集』が引用されるのは「行卷」のみである。このわずかな引用文から『教行信証』と『選択集』の関係をみていくことは一見困難であるように思われる。しかし、この引用文こそが『選択集』の要点を示唆していると

いう親鸞の視座を確かめることができよう。その点で親鸞が「行巻」に引用している積極的な意義を見ていく必要があると考えられる。言うまでもなく親鸞が『教行信証』で『選択集』を引用しているのは以下の「総結三選の文」である。

夫速^レ欲^ニ離^ル生死^二二種勝法中且^レ閣^ニ聖道門^ヲ選入^ニ淨土門^ニ欲^ニ入^ル淨土門^ニ正雜^ニ二行中且^レ抛^ニ諸雜行^ヲ選^ニ應^ル歸^ス正行^ニ欲^ニ修^ル於^ニ正行^ニ正助^ニ二業中猶^レ傍^ニ於^ニ助業^ニ選^ニ應^ル專^ニ正定^ニ正定之業者即是^ニ称^ニ仏名^ニ称名^ニ・必^ニ得^ニ生^ル依^ニ仏本願^ニ故^ニ

(「行巻」所引・『定親全』一・六七頁)

この文では、最初に「速やかに生死を離れん」とあることから、仏教の教理や思想の体系化を目的とするのではなく、人間の根源的課題を明らかにしようとしていることがわかる。つまり業縁において生死流転する衆生の仏道がどこで成就するのかを目的としているのである。この目的に立ち法然は、仏教を聖淨二門として教相判釈し、淨土門を選び入ることを勧める。そして行の決定的な選びとして、法然は正雜二行を分判し、さらに正助二行を判別して、称名念仏だけが「正定の業」であることを示す。その上で、なぜ称名念仏のみが正定の業であるかを、「仏の本願に依る」ためと明確に答える。これは、称名念仏が往生するための手段として自力により称するのではなく、仏の本願を根拠とした行であると押さえているのである。このように「速やかに生死を離れん」という人間の根源的課題に対して「称名」が「正定の業」となるのであるが、その根拠となる「仏の本願」を法然はどのように了解しているのだろうか。『選択集』の本願章にある問答や特留章で、

四十八願之中、既以^ニ念仏往生之願^ヲ而為^ス本願中之王^ト也。

(『真聖全』一・九五頁)

とあるように、法然は本願を念仏往生の願つまり第十八願として示している。その第十八願の内容は「心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて乃至十念せん」ということであり、十方衆生を淨土に生まれしめんという本願の大悲

心を意味する。中でも「心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて」と誓う本願の三心とは、法藏菩薩の永劫修行において選択された「乃至十念」を衆生の行として成就せんとする願心である。この第十八願をもって法然は念仏往生の根柢を顕示するが、親鸞は法然の一願建立に対して、第十七願・第十八願の二願をもつて行の本質を明らかにしようとするのである。それは「行巻」で、

凡就誓願有眞實行信亦有三方便行信其眞實行願者諸仏称名願其眞実信願者至心信樂願斯乃選択本願之行信也

(『定親全』一・八四頁)

と言われることから了解できる。第十八願を分相して、第十八願を信心成就の本願とし、第十七願を名号成就の願として「選択本願の行信」の内実を明らかにするのである。この二願を見ていく中で親鸞は「行巻」「信巻」共に因願文のみならず成就文を引用し、成就文の内容を重視する。

願成就文『經』言十方恒砂諸仏如来皆共讚嘆無量寿仏威神功德不可思議

(ナルヲ)

(『行巻』所引・『定親全』一・一八頁)

本願成就文『經』言諸有衆生聞其名号信心歡喜乃至一念至心回向願生彼国即得往生住不退転唯除五逆誹謗正法

(トオハ)

(『信巻』所引・『定親全』一・九七―八頁)

前者の第十七願成就文では、「十方恒砂の諸仏如来」が皆共に阿弥陀仏の威神功德の不可思議を讃嘆すると説いている。その諸仏が讃嘆する名号を聞くことにより、生死流転する衆生は如来の大悲に目覚めていく。それが信心歡喜であり、同時に念仏申す身となることであり、後者の第十八願成就文の内容を意味するのである。以上の二願の成就こそが「選択本願の行信」の根幹であり、法然の本願理解をさらに明確化した親鸞の了解といえよう。この親鸞の教示から、諸仏称名の歴史を示す第十七願は、第十八願という信心を成立する願の前提となり、背景となることが窺知で

きる。つまり第十七願に依つて第十八願が成り立ち、第十八願に依つて第十七願が開かれ、第十七願と第十八願は互いに循環し合い、互いを成就する関係なのである。諸仏称名によつて歴史的に証誠された選択本願の行は信の歴史的背景となる。それは名号を聞き、信心を獲得した衆生が称名讃嘆をもつて仏事に参加し、さらに念仏の新しい歴史を形成することを意味しているといえよう。このように親鸞が第十八願から第十七願を開示することにより、諸仏称名の歴史の顕現が「行巻」の三国の祖師の論釈として明証され、その帰結として「総結三選の文」が「行巻」に引用されるのである。このことから親鸞が「総結三選の文」を「行巻」に引用する積極的な意義が了解できるのである。

また、「行巻」では「総結三選の文」の後に、念仏における不回向の義と平等の義を押さえ、さらに『論註』の文を引用し、以下のように「行信」について述べている。⁽⁵⁾

爾者・獲^{ウレ}眞^ノ実^ノ行^ヲ信^者・心^ニ多^ニ歡^喜・故^ニ是^名・歡^喜地^ト・是^ヲ・初^ノ果^者・初^ノ果^聖者^尚・尚^ニ睡^眠・眠^ヲ・懶^ニ・懶^ト・不^ニ・至^ニ・三^ニ・九^ノ・有^ニ・何^カ況^ハ・十^ノ・方^ノ・群^ノ・生^ノ・海^ノ・歸^ニ・命^{スレ}・斯^レ・行^信・者^ハ・撰^テ・取^ス・不^ニ・捨^テ・故[・]・名^ニ・阿^彌・陀^佛・是^ヲ・曰^フ・他^ノ・力^ト・是^ヲ・以^テ・龍^樹・大^士・曰^ク・即^チ・時^ニ・入^リ・必^ズ・定^ス・曇^鸞・大^師・云^ク・入^リ・正^定・聚^之・數^ト・仰^テ・可^ク・憑^ズ・斯^レ・專^ニ・可^ク・行^ス・斯^レ・也^ト、

〔定親全〕一・六七―八頁

この文では、「爾れば」と先に引用された三国の祖師の文を結び、「眞実の行信を獲れば」と述べられる。ここで「眞実の行信」とあることは、衆生における行信ではなく、如来本願の現成としての選択本願の行信を意味する。それは第十八願と第十七願の内容を開示するものであり、如来の名号と大悲の願心を内実とするといえよう。この行信を獲ることにより歡喜地の位となり、二十九有に至らないことが示され、その展開が「何に況んや」以下の文で明確にしている。⁽⁶⁾ここでは「斯の行信に帰命すれば」とあり、「行信」と「帰命」の語句に注意できる。親鸞は、

歸^ハ命^者本^願招^喚之^勅命^也

〔行巻〕・〔定親全〕一・四八頁

と云うように、歸命を本願招喚の勅命と表わしている。つまり歸命とは、衆生が如来に対して帰依し、信願すること

ではなく、本願が衆生を招き喚ぶ勅命を意味する。帰命が本願招喚の勅命であるということは、真実の行信である如来の願心と別ではないこととなり、「斯の行信に帰命すれば」という表現は矛盾していることになる。なぜ親鸞がこのような表現としたかと言えば、この後に「撰取不捨」「阿弥陀仏」「他力」を押さえるように、「阿弥陀仏」が「行信」として実働している証を示していると考えられる。それは「行巻」で先に引用される善導の六字釈と関係する。

言^三南無^ト者^ハ即是^レ帰命^{ナリ} 亦是^レ発願^ニ回向^ノ之義^{ナリ} 言^三阿弥陀^ト者^ハ即是^レ其行^{ナリ} 以^三斯義^ニ故^ニ必得^レ往生^{ナリ} (『定親全』一・四七頁)

この文では、阿弥陀仏を「其の行」として、「南無」し、「帰命」することが阿弥陀仏の具体的な現行であるとしている。つまり、阿弥陀仏の現行そのものが帰命という本願の行であり、南無阿弥陀仏という名号をもって大悲の顕現を表わしているのである。⁽⁷⁾それは、親鸞が善導の了解を受けて

言^三即是^レ其行^ト者^ハ即^レ選択^ニ本願^ニ是也

(『行巻』・『定親全』一・四八頁)

と述べることや、『一念多念文意』で、

この一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりたまひて、無碍のちかひをおこしたまふをたねとして、阿弥陀仏となりたまふがゆへに、報身如来とまふすなり。これを尽十方無碍光仏となづけたてまつれるなり。この如来を南無不可思議光仏ともまふすなり。この如来を方便法身とはまふすなり。方便とまふすは、かたちをあらわし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふをまふすなり、すなわち阿弥陀仏なり。この如来は光明なり、光明は智慧なり、智慧はひかりのかたちなり、智慧またかたちなければ不可思議光仏とまふすなり。

(『定親全』三・和文篇一四五—一六頁)

と言われることから浮き彫りにされる。『一念多念文意』で「一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりたまひて」とあるように、法蔵菩薩は衆生の撰取不捨を願い、本願成就の事実として「阿弥陀仏となりたまふ」て

いく。それは、衆生が生死流転し続ける限り、法蔵菩薩は一切衆生の救済を願い、兆載永劫にわたって修行するといふ阿弥陀仏の根源的な用きを示すものである。さらに法蔵菩薩の発願修行の成就是衆生に知らしめんがために、方便として形を現わし南無阿弥陀仏の名号となり、衆生を根源的に喚び覚ます勅命となる。その名号の用きを親鸞は「光明」という実働性をもって教示しているのである。

このことから「行巻」では、阿弥陀仏を客体化して「阿弥陀仏に帰命」するのではなく「斯の行信に帰命す」ところに、「阿弥陀仏」の「撰取して捨てたまわず」という用きの実働性を見出したのである。つまり「この行信に帰命すれば」ということは、如来の撰取不捨の用きに対する衆生の応答であり、衆生に一心帰命の信が現前していることを表現していると考えられる。「阿弥陀仏」における「撰取不捨」という「他力」の用きは衆生に「いづれの行もおよびがたき身⁽⁸⁾」と喚び覚まし、本願成就の信心として顕現するのである。このことは『歎異抄』第一条から具体的に読み取ることができる。

弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏まふさんとおもひたつこゝろのおこるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり。(『定観全』四・言行篇三―四頁)

この文にある「念仏まふさんとおもひたつこゝろ」は、衆生が自力心によつて如来に帰依することではなく、如来の願心の現前である。それは、如来の名告りが念仏として衆生の上に現成することであり、如来の願心と一心帰命の信が即一であることを示しているのである。また「信巻」でも、

爾者若行若信無^ハ有^ハ一事^{コト}非^シ阿弥陀如来清淨願心之所^ニ回向成就^ニ非^ズ無^ク因^ニ他^ノ因^ニ有^ル也^ト可知^シ

【定観全】一・一一五頁

とある。親鸞は名号のみが如来の回向と押さえるのではなく、名号に開かれる信心も如来の願心の回向成就であるこ

とを述べている。行の如来回向は信に依ってあり、行によって信は如来回向であることを自証する。如来回向の念仏が大行を顕わし、清淨願心の回向成就として大信であることを顕わす。つまり「阿弥陀如来の清淨願心の回向成就」により「行信」は成立するのであり、ここに「選択本願の行信」という真宗の仏道の根柢があるといえよう。

そして「行卷」では、この行信における利益を

是以龍樹大士曰三即時入必定ト曇鸞大師云ハ入正定聚之教ト

〔定親全〕一・六八頁

と述べる。親鸞が「即時入必定」「入正定聚之教」と示すことは、本願の名号に帰依した信心の上に、この利益が開かれることを意味する。⁽¹⁰⁾とりわけ注意すべきが「入正定聚之教」の語である。このことについて親鸞は「証卷」で、

然煩惱成就凡夫生死罪濁群萌獲ニ往相回向心行ヲ即時入ニ大乘正定聚之教ニ住ニ正定聚ニ故必至ニ滅度ニ

〔定親全〕一・一九五頁

と言う。この文では、煩惱成就の凡夫・生死罪濁の群萌に開かれる信心の証果を示し、正定聚に住するが故に必ず滅度に至ることが述べられている。必ず滅度に至るとは、既に滅度に至ったということではなく、信心の行者は必ず滅度に至ることが決定しており、正定聚の位に住したことを意味する。しかし、正定聚と滅度は全く異なった二つの利益を意味しているのではない。『浄土三経往生文類』で、

大経往生といふは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力とまふすなり。これすなわち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらゐに住して、かならず眞実報土にいたる。これは阿弥陀如来の往相回向の眞因なるがゆへに無上涅槃のさとりをひらく、これを『大経』の宗致とす。このゆへに大経往生とまふす、また難思議往生とまふすなり。

〔定親全〕三・和文篇二頁

とあるように、願因・願果の必然的な因果関係にあり、本願力を根柢としていのである。如来の本願力によって決

定される必至滅度は、住正定聚において無上涅槃が証されることであり、滅度が必ず来るものとして既に現来していることにほかならないのである。これは「証卷」で「滅度」を転釈し、

然者弥陀如来從_ニ如_ニ來生_ニ示_三現_三報_ニ應化種種身_ニ也

(『定親全』一・一九五頁)

と述べられることから了解できる。滅度は常に衆生の上に現前することで明証され、衆生の信心の内に如来が現来していることを意味する。それは一心帰命の信が開かれることにより、「念仏もうさん」という如来を自証する仏道として難思議往生を歩むことである。つまり難思議往生とは、大涅槃を証することを内容とし、本願を自証し涅槃に至る証大涅槃の仏道を意味すると言える。このことから「速やかに生死を離れん」という仏教の根本課題に対して、念仏往生を語った法然の了解をさらに明確化して、親鸞は「難思議往生」と押さえ、証大涅槃の仏道の積極的な意義を開顕したのである。「行卷」で親鸞が「入正定聚之教」と押さえることは行信の利益を表わし、真宗の仏道が証大涅槃の仏道であることを顕示していると言えよう。

以上のように法然の「総結三選の文」から光号因縁積までの文を踏まえ、「行卷」における「選択本願の行信」と「行信の利益」の内容を確認した。この親鸞の了解を踏まえつつ、次に展開される光号因縁積の内容を見ていくことにしたい。

二、光号の因縁と信心の業識

「行卷」では以下のように光号因縁積が述べられる。

良_ト知_ニ無_ニ徳_ニ号_ニ慈父_ニ能_レ生_レ因_レ闕_ト無_ニ光_ニ明_ニ悲母_ニ所_レ生_レ縁_レ乖_ト能_レ所_レ因_レ縁_ト雖_ニ可_ニ和_レ合_ト非_ニ信_ニ心_ニ業_ニ識_ニ無_ニ到_ニ光_ニ明_ト土_ニ真_ニ実_ニ信_ニ業_ニ識_ニ斯_レ則_レ為_ニ内_ニ因_ト光_ニ明_ニ名_ニ父_ニ母_ニ斯_レ則_レ為_ニ外_ニ縁_ト内_ニ外_ニ因_ニ縁_ニ和_レ合_ト得_ニ証_ニ報_ニ土_ニ真_ニ身_ト (『定親全』一・六八頁)

この文では第一に、「徳号の慈父が無ければ往生の因が闕け、光明の悲母が無ければ往生の縁が乖くとし、名号と光明の因縁が和合して、信心の業識にあやまりがなければ光明土に到る」と説かれている。そして第二に、「眞実信の業識を内因とし、光明・名号の父母が外縁となり、内外の因縁が和合して報土の眞身を得証する」と述べられている。先哲は、この文の「徳号の慈父」から「所生の縁垂きなん」までを初重とし、「能所の因縁」から「報土の眞身を得証す」までを後重として、因縁が二度出てくることから両重因縁釈と呼んでいる。古来から「両重因縁」という呼び名にそつて様々な了解がなされているが、大きく二説を見ることができるといえる。

第一は「両重因縁両重因果」の義である。初重は名号を因とし、光明を縁として、両者が和合することにより信心が生ずることを示し、後重は信心を因とし、光明名号を縁として往生することを示している。つまり、初重は獲信の因縁、後重は得証の因縁を意味するものである。しかしながら、信心は往生浄土の因であつても果とは成り得ないのであり、信心を果と捉える点に問題が残る。

第二は「両重因縁一重因果」の義である。信心は果ではなく因であり、光明名号の因縁はいずれも報土の往生を果とする二重の因縁を説いているが、因果関係は一重に見なければならぬものである。この了解も初重と後重が並列的に了解され、初重の意図と後重の意図が明確にされていない。それでは「光号因縁釈」の文をどのように了解すべきであろうか。

まず初重であるが、名号が「無」ければ往生の因が「闕」け、光明が「無」ければ往生の縁が「乖」き、信心の業識が「非」ずば、光明土に到ること「無」し、と「無・闕・無・乖・非・無」の関係が見られる。つまり「もし〜無ければ」という仮定形で文が構成されている。このことは、光号因縁釈の典拠とされる『観経疏』『序分義』散善顕行縁にある父母の恩の文でも見られる。

既^ニ有^レ父母^一、即^チ有^二大恩^一。若^シ無^レ父^者、能^レ生^之因^即闕^一。若^シ無^レ母^者、所^レ生^之緣^即乖^一。若^シ二^人俱^ニ無^レ、即^チ失^二託生^之地^一。要^ス須^ス父^母緣^具方^有受^身之^処。既^ニ欲^レ受^レ身^一、以^テ自^ノ業^識為^二内^因一[、]以^テ父^母精^血為^二外^緣一[、]因^緣和^合故^有此^身。以^テ斯^ノ義^故、父^母恩^重。

〔眞聖全〕 一・四八九―九〇頁

この文の初重は父が能生の因、母が所生の縁として、二人がいなければ託生の地を失うとある。後重は自の業識を内因とし、父母の精血を外縁として、因縁和合することによりこの身があるとされている。つまり、この身の受生が問題にされ、「無・闕・無・乖・無・失」と表現することで父母の恩を確認しているのである。子は父母が存在することにより、生まれると考えられるが、それは客観的事実にすぎない。子が誕生することにより、父母となりうる点では、子と父母は同時に存在することになる。しかし、子が父母に対する恩を持つことによつて、客観的事実ではなく、初めて父母の存在意義が成立するのである。その内実は子の身を誕生させた業縁への謝念があるといえよう。

以上のような『観経疏』の了解を踏まえ光号因縁釈を考えるならば、親鸞は光明と名号への謝念を浮き彫りにするため「もし無ければ」という仮定形で構成したことがわかる。名号と光明が「マシマサズバ」光明土に到らないということは、名号と光明が我が身に用く実働性を明確にしているのである。それは「仏の本願に依る」という法然の教言が親鸞の中で確信された証であり、「雑行を棄てて本願に帰す」ところに開かれた見地なのである。その内実は、前節で考察した第十七願と第十八願の關係からも了解できる。衆生が南無阿弥陀仏に出遇うのは諸仏の称名であり、名号を聞くことにある。名号に出遇うことが因となり、それを縁として光明の大悲摂化の用きが自覚される。光明という阿弥陀仏の大悲摂化の用きそのものが、名号という名となり、一切の衆生に知らしめんと招喚する。名号無くして、光明に出遇うことはできず、光明が無ければ名号は教理となり、衆生に生きて用く現実態とはならない。親鸞は、このような如来大悲の実働性を光号因縁として具体的に明らかにしたのであり、そこに「大行」という大悲の顕

現を見出したのである。さらに、この光明・名号の因縁の領受を「信心の業識」として表現する。⁽¹³⁾

「信心の業識」は、古来から信心が業識であるという説や名号の父、光明の母が因縁となつて信心の子が生ずるといふ比喩的な捉え方、『俱舍論』の結業所生の識、十二因縁の第三識支、『般舟讚』の「定有心識」、生命の主体、過去の業に報いられて輪廻している識、また善導の言う「自の業識」と同様のことと捉え比喩表現にすぎないという説など、様々な了解がある。しかしながら、親鸞の言う「信心の業識」は、善導が語る「自の業識」と意味が全く異なる。それは善導が「自の業識」として、人間受生の因縁を説いているのに対し、親鸞は「信心の業識」と信心の因縁を説いているからである。では親鸞の意図する「業識」とはどのように了解すべきか。

「業識」の「業」に注目すると、後重で「真實信の業識」と言われるように「真實信」の質と関係している。「真實信」とは、先程からも述べているように衆生が発すものではなく如来の本願力を根拠とするのである。それは『浄土論註』で、

此中ニ仏土不可思議有ニ種力一二者業力謂法藏菩薩出世善根大願業力所成ニ者正覺阿彌陀法王善住持力一所撰ニ

〔真仏土卷〕所引・〔定親全〕一・二五三頁

と言われることや、『観経疏』で

言弘願者如大經說一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀仏大願業力為増上縁也

〔行巻〕所引・〔定親全〕一・四七頁

と述べられることに関係する。つまり、「業」とは「法藏菩薩の出世の善根、大願業力」、「如来の大願業力」を内容とし、それは信心の内実そのものを指す。

そして、「識」は『教行信証』における「識」の左訓を見ると「サトル」や「シル」などがある。⁽¹⁴⁾ 中でも「行巻」

に引用される『往生礼讃』の左訓に「タマシイ」⁽¹⁵⁾とあることに注意すべきである。つまり親鸞が意図する「識」とは、後述する「信心のたましい」であり、同時に法蔵菩薩の發願修行を意味すると考えられる。これは親鸞が、

衆生聞^テ「仏願」生起本末^ヲ「無^シ有^ト疑心[」]

〔信巻・「定親全」一・二三八頁〕

と押さえることと同じであろう。「仏願の生起本末」とは、阿弥陀如来因位法蔵菩薩の兆載永劫の修行の成就であり、このことを疑いなく信ずることが信心の内実である。⁽¹⁶⁾ここに親鸞と善導の「業識」の捉え方の違いが見られるのである。

このことは曾我量深が「信心の業識」について以下のように述べることから明確になる。⁽¹⁷⁾

信心の業識とは信心のたましい、自分自身ということでしょう。お念仏は親、信心は自分自身。お念仏の父と母というものがあつて信心の自分自身があるのであるが―父と母があつて自分が生まれたと、一応こう言うのだが、自分自身というものは父や母に生んでもらう以前からある。たましいは久遠劫の昔からある。(中略)業には自己意識というものがあつて―業には責任者というものがある。人間が生活してゆくと、そこに自覚、責任を持つ。(中略)たましいが南無阿弥陀仏というすがたになつたのをお助けという。南無阿弥陀仏というたましいが、どんなにみずほらしくとも、そのたましいが如来の本願によつてお助けいただき、それが信心の業識というものになるのでしょう。

〔「親鸞との対話」・五三―五頁〕

信心の業識とは「信心のたましい」であり「自分自身」であり、それは「如来の本願によつてお助けいただく」ことであると言う。このことは曾我が、

浄土真宗は法蔵精神を感得するものが浄土真宗である。浄土真宗に生をうけてゐるものはみな法蔵魂を感得せねばならぬ。法蔵魂を感得する道が二種深信、機の深信である。宿業の自覚は法蔵魂を感得する道である。この法

藏魂に随順し信順する。機の深信は捨てることだといふがたゞ捨てるのではなく、そこにも亦、信順の義がある。

〔曾我量深選集〕第六卷・一六一頁〕

ということにも通ずる。「宿業の自覚」が「法藏魂」を感得することであり、感得する道が「罪惡生死の凡夫」の信知を指す「機の深信」であると云う。機の深信とは、自己自身の罪惡生死の凡夫の自覚であり、無始以来永劫に流転して出離の縁無きことの自覚である。⁽¹⁸⁾この自覚は単に知的認識を意味するのではなく、宿業の自覚を示唆するものであり、本願との出遇いによる信知の内容である。つまり自身の罪業を深く信知したことは同時に阿弥陀の大悲本願に対する限りない信知があると言えるのである。その内実は法藏魂を感得することであり、法藏菩薩の願心への目覚めを意味すると考えられるのである。これらのことから「信心の業識」とは、法藏菩薩の發願修行の目覚めであり、同時に自身における罪業の信知であるということができよう。

また「信心の業識に非ずば」と信心の業識に対し、「非ず」という強い打ち消しをしている。このことは、信心の業識が無ければということではなく、信心の業識にあやまりがなければということを意味している。つまり、信心の質を問うているのであり、決して因なる名号に執着する質の信心ではないことを表わすものである。⁽¹⁹⁾もし信心が執着に基づく自力の信心であれば「光明土」に到ることは無いのである。その点で初重を単に光明・名号・信心・往生の関係を並列的に説明しているのではなく、名号・光明という大行の実働性と大行と信心の関係を立体的に教示しているのである。

次に後重を見ると、名号と光明を外縁とし、真實信の業識を内因としている。外縁に当たる名号と光明に関しては初重で述べた通りであるが、親鸞が内因に当たる「信心の業識」を「真實信の業識」と言い換えていることに注意したい。これは初重で確かめられた信心の質を自覚的な内容として押さえた証であり、如来の大願業力の自覚と罪業の

信知を示している。このような「真実信」においてのみ「報土の真身を得証す」ことができるのである。

次の「内外の因縁和合して」とは、名号・光明と信心という別々のものが合することを意味しているのではない。名号・光明の外縁を領受したことが衆生に発起する信心であることを示しているのである。それは名号・光明と信心は本願力を根拠とし、名号と光明が衆生の上に現行することが信心であることを意味しているといえる。このことは光号因縁積の後に引用される『往生礼讚』で、

宗師言^へ・以^二光明名号^一撰^二化十方^一但使^二信心^一求念^二

〔定親全〕一・六八頁

と言われることで明証される。阿弥陀仏は名号と光明をもって衆生を撰化せんとし、その用きに応答することが信心なのである。ここに「斯の行信に帰命す」という、名号と光明という大悲の現行が信心と即一であることが見られるのである。

また、「報土の真身を得証す」については、古来から初重の「光明土」に往生することと同義として了解されている。しかし、この表現は『教行信証』においてこの箇所のみであり、なぜ親鸞がこのように表現したのかを考えなければならぬであろう。⁽²⁰⁾ まず、「報土の真身」ということは、単に真実報土を意味しているのではなく、報土における法性法身であり、そのことは阿弥陀仏を意味する。前節で考察した「証卷」の展開からも明らか様に、阿弥陀仏を得証するとは、常に阿弥陀如来を明証し続けることであり、証大涅槃の仏道を歩むことを指している。初重では「能生」「所生」「光明土」と往生の展開を示していたが、後重で「報土の真身を得証す」とあることは証果を表わしているといえよう。⁽²¹⁾ それは、真実信の業識という内因と光明・名号という外縁が念仏者の原動力として如来を自証する歩みになることを意味している。そこに光号因縁積の後に引用される『五会法事讃』で

念仏成仏是真宗

〔定親全〕一・六八頁

と念仏成仏の道を説いていることが明確になるのである。ここで言う「成仏」とは『一念多念文意』で、

それ衆生あて、かのくににむまれむとするものは、みなことごとく正定の聚に住す。

かならずほととぎすに成るべきものなるなり

〔定親全〕三・和文篇二二九頁

と「正定の聚」に左訓があるように、必ず仏になるべき身となることである。このことは正定聚との関係からわかるように証大涅槃の仏道の意義を明証しているといえる。つまり、法然が掲げた念仏往生の義を親鸞は念仏成仏の義として根源化したことにはかならないのである。それは

是以龍樹大士曰「即時入必定」曇鸞大師云「入正定聚之教」

〔定親全〕一・六八頁

と言われることを明証し、「愚禿鈔」で、

真実淨信心内因 撰取不捨外縁

信受 本願 前念命終 「即入正定聚之教」文「即時入必定」文「又名必定菩薩也」文

即得往生 後念即生

他力金剛心也。応知

〔定親全〕二・漢文篇一三頁

と述べられていることから浮き彫りになるであろう。真実淨信心が内因となり、撰取不捨が外縁となることは、本願を信受することであり、前の自我の命を終え、後の新しい自己へと即生する身になることである。それは新しい自己へと再生する一念一念の往生の歩みを表わし、自力に執着した命を終え、他力の生に即生することを意味している。撰取不捨という外縁の用きにより、自らの我執を知らされていく時、我執の身から新しい自己へと即生する難思議往生が開かれるのである。それが生死流転を解脱していく証大涅槃の仏道であり、法然の掲げた「速やかに生死を離れん」という仏教の根本課題に対する親鸞の応答と言える。ここに後重で教示された行・信・証の因縁果は、法然の掲

げた念仏往生を根源化して念仏成仏という真宗の仏道を明らかにしたことになるのである。

光号因縁積の最後で、親鸞は「散善義」から、

真宗回^{カクシト}ニ^ヤ遇^ヤニ^也

〔定親全〕一・六八頁

と引用する。生死流転し、出離の縁なき衆生にとつて真宗、つまり如来の本願に遇うことは不可能である。⁽²²⁾しかし、親鸞が光号因縁積を語ったことは如来の本願に出遇い、真実の行信を獲得した証である。その点から言うと、親鸞が如来の本願に出遇った故に、無有出離なる我が身を信知した自覚的表現としてこの文を引用したのである。真宗の仏道が成り立つことは名号・光明・信心の和合から展開されるのであり、和合することが希有なることを改めて押さえているのである。この様に、光号因縁積の後に「真宗」の文が引用されることは、親鸞が「真宗興隆」を課題にしてきた何よりの証であり、法然の本願念仏の教えを明証したことが了解できるのである。

このように「行巻」において光号因縁積が語られることは、法然が述べた念仏往生の意義を「選択本願の行信」を内実とし、より自覚的に展開したことにある。つまり初重で名号・光明という大行の実働性と大行と信心の関係を明確にし、後重では初重の内容をより自覚的に行・信・証という因縁果で真宗の仏道を語るのである。それは法然が「選択集」三心章で、

涅槃之城^{ニハテ}ヲ^{ハス}以^レ信^ヲ爲^ス能^ト入^ト。

〔真聖全〕一・九六七頁

と述べるように、涅槃の城に入る因が信心であることを、親鸞が証大涅槃の仏道として具体化しているともいえる。⁽²³⁾光号因縁積では、大行の内容を明らかにする上で信と証の関係を述べているが、信と証の詳細については如来の願心について顕わされた「信巻」の三心一心問答と「証巻」で展開されることになるのである。

おわりに

以上のように「行巻」で引用される「総結三選の文」から光号因縁釈を精読することにより、光号因縁釈が真宗の仏道を明らかにしていることが了解できた。それは名号・光明・信心・往生を並列的に説明していくのではなく、「選択本願の行信」を内実とし、より自覚的に真宗の仏道を明示したことにほかならない。このことが具体的に語られるのが「光明」「名号」「信心の業識」「報土の真身を得証す」ということである。光号の因縁から「名号」と「光明」の実働性が示され、その自覚的内容が「信心の業識」として法蔵菩薩の発願修行と機の深信が教示される。そして、両者の和合が「報土の真身を得証す」とことと捉えられ、常に阿弥陀を明証し続ける証大涅槃の仏道を明示するのである。

これらのことから光号因縁釈は、法然における仏教の根本課題である「速やかに生死を離れん」に対する親鸞の応答であり、『教行信証』において真宗の仏道を的確に言い当てた重要な釈義であるといえよう。

注

- (1) 『定親全』一・三八〇—三頁
- (2) 『定親全』一・一六頁
- (3) 本稿では「光号因縁釈」という名称を使用した。それは、この箇所が「光明」と「名号」の用きを明確にすることを内容にしていることと、両重因縁釈という名称への問題提起からである。
- (4) 『真聖全』一・九四三頁
- (5) 『教行信証』の御自釈において「行信」は、計七箇所が使われているが、そのうち五つは「行巻」に収められている。
- (6) この文は「行巻」に引用される『十住毘婆沙論』『入初地品』を典拠としている。また光号因縁釈も『十住毘婆沙論』『入

- 初地品」の一文を典拠にしているという指摘は多い。これらの引用に関しては稿を改めることにしたい。
- (7) 『浄土三経往生文類』には「この如来の往相回向につきて、真実の行業あり。すなわち、諸仏称名の悲願にあらわれたり。」(『定親全』三・和文篇二二頁)とある。大行は第十七願という大悲願心が回向される如来回向の行であることを示す。つまり阿弥陀仏がそのまま具体的な活動相として「あらわれ」出ているのであり、如来の大悲願心を名号に見出し本願念仏そのものが現行していることがわかる。
- (8) 『歎異抄』・『定親全』四・言行篇六頁
- (9) 本論では信心について触れることができなかった。詳しくは拙稿「疑蓋無雑の信」(『真宗教学研究』第二二号・二二—二頁)を参照されたい。
- (10) この文の後に「仰可^{イテ}憑^シ斯^ラ專^キ可^シ行^ス斯^ヨ也」とある。これは自力を根拠とするのではなく、他力に依ることを象徴している文と考えられる。
- (11) 『定親全』一・三八一頁
- (12) 宮城顛稿『正信偈のころ』・二二三頁参照。
- (13) 金子大築が「光明・名号といっても、光明と名号とを並べて考えているのではなく、その光明・名号の因縁というものが、本当に自分のものとして受け取られたことが、すなわち信心である。そういうことになれば、信心が因で、光明・名号とも縁である、ということがができる。」(『教行信証総説』・一七九頁)と指摘していることを参照した。
- (14) 「識」の左訓は「サトル」(化身土巻)・『定親全』一・二六九頁・三一頁等)、「シル」(証巻)・『定親全』一・二二九頁、「真仏土巻」・『定親全』一・二四五頁等)「ココロ」(信巻)・『定親全』一・一一一頁)がある。
- (15) 『定親全』一・四二頁
- (16) 「きくといふは、本願をき、てうたがふこゝろなきを、聞といふなり。またきくといふは、信心をあらわす御のりなり。」(『一念多念文意』・『定親全』三・和文篇二二六頁)
- (17) 「信心の業識」を曾我量深の了解から考察した研究は幡谷明著『親鸞教学の思想史的研究』・四八三—四頁、星名万美稿「諸仏の家―大行が展開する信―」(『大谷大学大学院研究紀要』第一三三号・六六頁)などが見られる。
- (18) 機の深信が「二者^{ニハ}決定深信^{ニクズ}自身現是罪惡生死凡夫、曠劫^{ヨリ}已來、常没常流^{ニシテ}転、無^ク有^ル出離^ノ之縁。」(『散善義』・『真聖全』

一・五三四頁」と語られることは「二者、決定深信ニホクニシテ、彼阿弥陀ニ、四十八願、撰ニ受衆生ニ、無疑無慮ニ、乘ニ彼願力ニ、定得ニ往生ト」(同上)という法の深信との関係により成立する。機の深信の表白の根底には法の深信があり、信心の業識とは二種深信を内含した表現であるといえる。

(19) 親鸞は名号執持の問題を第二十願から明示していく。このことについては拙稿「親鸞における第二十願の機の考察」(『宗教研究』第六九号第四輯・二〇三頁)を参照されたい。

(20) 『教行信証』以外に同じ表現があるのは『浄土文類聚鈔』の「清淨無碍ニ、光耀朗ニ」一如法界ニ、真身ニ、頭ニ」(『定親全』二一・漢文篇一四一頁)であり、如来を示す表現であることが想起できる。

(21) 「それ故に因縁の語に対して特に果といはるゝものを求むれば、それは報土の真身である。たゞ往「生」といふのみでは、未だ果を現はすことはできぬ。」(金子大築著『教行信証講説教行巻』・三二二頁)

(22) 安田理深は「本願に遇うとか、信を獲得とか、釈尊以前の歴史というものをあらかわすのが巨。三国の歴史は釈尊以後、それについては難。そういう区別がある。」(『安田理深選集』第十五卷上・四一八頁)と述べている。

(23) この文については拙稿「証大涅槃の真因」(『真宗教学研究』第二三号)を参照されたい。

尚、『定本親鸞聖人全集』は『定親全』、『真宗聖教全書』は『真聖全』と略記した。

(本学非常勤講師 真宗学)

〈キーワード〉両重因縁、選択本願の行信、信心の業識